

サマンバヤ通信

サマンバヤの会 THE GROUP OF SAMANWAY インドの子どもたちの教育のために
for Education to Every Child

CONTENTS

30周年記念会報告 / 上期送金完了の報告 / 30周年記念会を終えて / アシユラム近況報告 / マングローブ / お知らせ



30周年記念会での集合写真(2008. 6. 14)

サマンバヤの会 30周年記念会報告

於：学士会館分館

当会代表 寺田文男 (TERADA Fumio)

2008年6月14日、サマンバヤの会の30周年を記念しての集まりが、東京・本郷の学士会館分館で記念会として催されました。朝8時43分ごろ、岩手宮城内陸地震があった日としても記憶に残る日となりそうです。

記念会は二部構成で行われ、第一部は、代表寺田文男の挨拶に続き、副代表、恵泉女学園大学で国際開発学の教鞭を執る大橋正明によるサマンバヤ・アシユラムの活動の役割と現状を解説、そして、1996年農業実習生としてアシユラムに滞在した東京農業大学O.B 西村考拡がアイ・キャンプの記録上映と解

説をもって、サマンバヤ・アシユラムとサマンバヤの会の歴史の一部として報告されました。大橋の解説は、インドのカースト事情、ガンディー主義と呼ばれる社会運動の説明、そしてその運動の期待の星となった子どもたちとその後の人生。35年の長きに渡る研究と追跡調査を短時間で駆け抜けるような解説で、インドのことサマンバヤ・アシユラムのことを良く知っている人も知らない人も興味をそらさず聞くことができるものでした。西村の映像は、それまでアイ・キャンプに誰も立ち会った者がいなかったなかで、初めてVTRに撮られて持ち帰ったものでした。

休憩を挟んで、立食パーティ形式で懇親会を第二部としました。

東大教育研究所理事長で本会呼びかけ人の大橋憲三氏からお言葉を頂き、同じく呼びかけ人の村尾望氏の乾杯で歓談が始まりました。参加者の多くはサマンバヤの会とは1994年以降のお付き合いとはいえ、数年ぶりの再会という方がいたりとちょっとした同窓会が開かれていた場面もありました。記念会の幹事のひとりである佐藤有紀が資料と写真集め等長い時間をかけて制作したスライド「サマンバヤへの道」を寺田の解説で見ながら充分歓談していただけたものと思います。また、サマンバヤの会創設期からの資料展示の案内を事務局長の木村裕文によってなされました。そして、参加者一人一人順番に自己紹介をしていただきました。短い時間ではサマンバヤの会とどう関わってきたかなど、充分にお話しできなかったかと思いますが、北は北海道・福島、西は愛知・静岡をはじめ各地からおいでになったみなさんからサマンバヤの会への暖かいメッセージをいただきました。



当会副代表 大橋正明（中央）

寺田から会を大きくして不自由な運営をするよりは、その時々規模に見合ったことだけの活動する、いわば継続性を重視した会の発展に方向性を見出したい。との発言をもって記念会を終了しました。

この度の30周年記念会の開催に際し、参加していただいた方、寄付をいただいた方ありがとうございました。また「所要で」「仕事がある。」「子育て真っ只中。」「急に仕事」「新幹線が止まっていて」「案内状来てない」等々、来られなかった皆さん、連絡ありがとうございました。次の機会にお会いできることを楽しみにしています。

最後になりましたが、30周年記念会の収支を報告します。

収入	
事前入金及び寄付	¥90,000 -
当日入金及び寄付	¥122,000 -
計	¥212,000 -
支出	
学士会館支払い	¥127,753 -
持ち込み飲料・コップ	¥3,393 -
計	¥131,146 -
収支	¥80,854 -

黒字分はサマンバヤに会会計に繰り入れさせていただきます。

2008年上期送金完了のお知らせ

2008年上期送金を4月3日にBank of India 東京支店発行の送金小切手により完了しました。インドからの領収書は6月15日に送られてきました。

アシュラムに対して里親26名分の養育費プラス寄付で送金額 = Rs.75,000 - (昨年上期送金額はRs.80,000 -) でした。円換算205,500円。当日レートは2.74でした。

サマンバヤの会 30周年

記念会を終えて

当会代表 寺田文男 (TERADA Fumio)

1978年6月18日、この日サマンバヤの会が誕生しました。大橋正明、須田沃、寺田文男の3人が世話人会を作り世話人代表を大橋正明としました。他に役職はありませんでした。サマンバヤの会の役割

は「窓口として機能する」ことで、今も本質的には変わりありません。窓口としてのサマンバヤの会というのは、こんなことからはじまりました。



当会代表 寺田文男

1978年4月10日、朝日新聞朝刊国際にサマンバヤ・アシュラムの記事が載りました。蜷川特派員のものでしたが、この記事に対して読者から問い合わせがありました。そのうちの何人かは、サマンバヤ・アシュラムの子どもの養育費を出したい、というものでした。養育費を送金する「里親」には、1973年から数年間でしたが東京農業大学アジア・アフリカ研究会の学生が会として2名の子どもを養育していましたので、農大生が云々ということとはもかくとして、「里親」が記事に取り上げられていたことは容易に想像が付くところです。「名目だけの里親になって月1,800円を送る」とある記事には、東京本社記事には確信があるものの、そのサマンバヤ・アシュラムなるものと交流があるわけでもなく、やむなくか、必然か、その記事のネタを提供したであろう日本在住の人物に対処を頼んできたというわけですが、ここんところは私の推察です。

サラリーマンであった大橋正明は、問い合わせ者ひとりひとりに対応したこととおもいます。そして、一人では荷が重いと感じたのか、「会」を作って役割を分担しようと考えたのか、或いは、そのときの反響を何とか持続させて、まとまった力でサマンバヤ・アシュラムを支援しようと考えたのかもしれませんが。その日、発足会に集まったメンバーは、アジア・アフリカ語学院でヒンディー語のご学友でその日から世話人となった須田沃、寺田文男、さらに東京在住の新聞社に問い合わせをした人、先に活動した南

インドサイクロン被害を救済する会の有志の人などなど10数名でした。会場は、私たちのヒンディー語の先生でもありますナレーシ・マントリー先生のお宅でありました。

会の仕事は、問い合わせ者に対してサマンバヤ・アシュラムの説明と、送金方法の説明です。インドのお金を送るには、インド側の事情で限られた送金方法しかありません。それは、現在も変わりありません。インド銀行(Bank of INDIA)からルピー立てで送金することを細かく説明するのですが、インド銀行は東京と大阪にしか支店はなく現実の問題として簡単に送金できないということになります。では、サマンバヤの会にお金を送っていただければそのお金をインド銀行を経てサマンバヤ・アシュラムに送金のお手伝いをしましょうというのがサマンバヤの会の主なる仕事でした。ご自身の動機で里親を希望する方とサマンバヤ・アシュラムをつなぐ「窓口として機能する」会がここに誕生したわけです。そして、世話人会の代表たる世話人代表が手紙のやり取り、送金手続きとほとんどすべての仕事をすることになる、しかもその時点では、会が使えるお金はありませんから、封筒、切手代、銀行の手数料などなどすべて代表の手弁当でしたので、初代世話人代表の大橋は、会というさらに荷物を肩に乗せて忙しくなったのかもしれませんが。

サマンバヤの会略史しによれば『1993年、夏「インドに光を」準備会を経て、会の拡大に努め』とあるように、ここから里親会員、賛助会員、ボランティア会員の会員制にしてそれまでなかった「会が使えるお金」を会費から賄い、会員の募集を積極的に広報し、サマンバヤ・アシュラムへの資金援助を強化することになりました。会が会員数を増やし、少し大きくなったら独自のプロジェクトで助成金を受けてインドの社会活動に参加していこうなどの提案も無かったわけではありませんでした。「インドに光を」のネーミングは意味が無いわけではないのですが、それよりもサマンバヤの会の更なる活性化を願い、友人たちに声をかけるためのきっかけと理解していただきたいと思います。後に、この活動強化策をとったときを「再開」「再生」とか「ねむりからさ

めた」と表現することがありますが、それまでに送金者が少なくなったことは事実としても、私が思う「勧誘して、説得して、お願いしてまで里親になってもらうものではない。サマンバヤの仲間になって協力したいという自発的な（ボランティア）もので無ければ意味が無い」という観点から言えば、しっかりサマンバヤの会は健全に活動をし続けていたのです。と言うとあまりにも過去にこだわっているようで格好わるいのですが、その「再生」サマンバヤの会の活動は、サマンバヤ・アシュラムにとっても私たち日本で支援するサマンバヤの会会員にとっても更に意味あるものにしたいということにほかなりません。

サマンバヤ・アシュラムとその仲間たちが、私たちの資金を今まで通り有効に使ってくれることが願いであるのですが、「資金援助はもう要らない！」と言って来る日が来るのかどうか分かりませんが、サマンバヤの会は皆様からの有形無形のご支援の期待を裏切らないよう「できることだけ」を着実に、そして模索しながら活動をつづけてまいります。

サマンバヤ・アシュラムの近況 報告 (2008 年 3 月)

濱野 聡 (HAMANO Satoshi)



濱野 聡 (右)

私が 2008 年 3 月 9 日から 5 日間サマンバヤ・アシュラムに滞在し、見てきたサマンバヤ・アシュラムの状況について報告しようと思います。

私がサマンバヤ・アシュラムに到着すると、そこでは白内障患者のためのアイキャンプが行われていて、とても多くの老人たちが列を成して自分の診察の番を待っていました。患者たちは無料で簡単な診察や血圧測定、消毒等を施してもらい、手術が必要な人には後日、手術が行われるというものでした。アイキャンプでは、アシュラムの年長の子どもたちや、地域の小中学生、医学生などがボランティアとして参加していました。この季節に行われるアイキャンプでは、3 日間で約 5000 人の患者が手術を受けて、11 月に行われるアイキャンプも合わせると 1 年間で 3 万人弱の人たちが手術を受けます。インドの貧しい地域には大きな医療需要があるということ、現場を目の当たりにすることで感じる事ができました。



元気そうなアシュラムの子ども (2008. 3)

続いて、滞在 3 日目にドワルコ氏に同行して、バグハスクールとその周辺地域で行っている溜め池と灌漑設備作りの活動を見てきたことを報告します。バグハスクールには多くの子どもたちがいて、バグハに住んでいる子どもとバグハに通う子どもたちがいました。バグハスクールの敷地内の広大な土地では作物を作っており、子どもたちはフィールドから生活する為の知識を学んでいました。そして、私がとても興味を持ったものとして、バイオガスの利用がありました。バイオガスは家畜の糞尿を発酵させ

て、料理を作る際のガスとして利用されてました。私は、知恵を活かして自然の中にあるもので生活している村の姿にとっても驚きました。

サマンバヤ・アシュラムが支援して作られたため池では、ドワルコ氏が農民と話し合い、貯め池の状況などを確認していました。ドワルコ氏は農民たちにいかにして水を貯めるか、またその水をいかにして農地へ流すか等の知識を教え、実践していました。この活動は現地に直接ドワルコ氏が赴くことで、効果的に行われているようでした。水が得やすくなることは村における農作物の生産性向上、さらには農民たちの生活向上に寄与していました。この視察を通して、私はドワルコ氏による地道な活動は着実に成果を出しているのではないかと感じました。

最後にサマンバヤ・アシュラムの子どもたちの様子をお伝えします。私が滞在していた期間に、ちょうど村で結婚式が行われているということでアシュラムの子供たちの多くは一時村に帰っていて、私は18人の子どもたちにしか会うことができませんでした。しかし、お祈りの際には年上の子が年下の子を注意するなどの様子を見るのが出来、上の子がしっかりと下の子の面倒を見ているのだなと感ずることができました。そして何よりも子どもたちは、私の部屋に遊びに来て、素敵な笑顔を見せてくれました。私はこの笑顔を見ただけで、アシュラムの子どもたちはとても元気に育っているのだということを感じることが出来ました。



アシュラムの子どもたち (2008.3)

以上、簡単ではありますが近況報告とさせていただきます。

今回の訪問にあたり、協力してくださった寺田さん、大畑くん、ドワルコ氏、また関わった全ての方に感謝いたします。

「マングローブ」を仕事に

山上庄子 (YAMAGAMI Shouko)

沖縄へ来てもうすぐ2年になる。1年目はあまり寒くないなと思っていた冬も2年目ではとても寒く、布団が1枚増えたり、年末年始などで本土へ帰った際に、木々が葉を落とし、なんとなく寒色の茶色い風景を見て落ち着いたり、そんなことを感じるようになってきたところだ。

私は特定非営利活動法人国際マングローブ生態系協会というNGOで研究員をしている。琉球大学農学部馬場繁幸教授が事務局長を務めるこの協会では、年間いくつものマングローブに関するプロジェクトを実施している。興味のある方は、ぜひ協会のホームページをご覧ください。

私がこの仕事についてのは、ある1本の電話からだった。馬場先生からJICAの研修コースで宮古・石垣・西表に3週間滞在して研修をするのだけれど、引率をしないかという連絡をいただいた。直ぐにでも来てほしいとのことであった。大学4年生の夏にマングローブに興味があり、4ヶ月間西表島に滞在していた私は、いろいろ状況もわかっていて都合が良いということであった。1ヶ月の仕事か、とすぐに沖縄に飛んできて、何と今にいたる。我ながら、人生何があるかわからないなあ…と思いながらも、今はすっかり仕事にのめりこんでいる。

国際マングローブ生態系協会 (International Society for Mangrove Ecosystems) 通称 ISME (イスメ) では、JICA 沖縄国際センターから委託を受け、年間2~4の集団研修コースを実施している。中でも最も長いコースが、現在私がコーディネーターを担当し、6月から2ヶ月半にわたり実施される「マングローブ生態系の持続可能な管理と保全」コースである。

JICAは各地に国際センターを持っており、各国際

センターで年間いくつもの研修員受入事業を行っている。研修コースはそのコース内容に合わせて専門機関に委託をして研修を実施するという仕組みである。私の担当しているマングローブコースは、沖縄国際センターから委託を受け、研修員はここに滞在しながら研修を受ける。

来てみてわかったことがたくさんあった。この仕事は JICA の研修コース。つまり、外国人を相手にするため、常に英語を話さなくてはならない。中学・高校・大学と英語は常に成績が悪く、苦手だった私にとって早速大きな壁か！と思ったが、実は私だけでなく、研修員も発展途上国と呼ばれる国々から集まってきており、母国語を英語とする研修員の方が少ない。同じ条件にも関わらず、この語学力の差は自分の勉強不足に反省させられた。やはり仕事を進めていく上で、研修員とのコミュニケーションはとても重要な部分である。研修員には少しでも自国に帰って役に立つ技術や知識を得ていただくため、計画から私も頭を抱えながら進めていく。

研修員の国も様々、そして所属機関によっても求めるものが異なる。マングローブ生態系と一言と言っても、内容は幅広く、全国各地から、時には海外から専門の先生に講師の依頼をする。植物社会学、土壌、地形地質、貝類、爬虫類、経済、文化人類、魚類、リモートセンシング、環境教育、サンゴ、藻類、造林、などなど、研修内容は様々だ。40人以上の先生方にご協力いただいている。マングローブについて興味があった私にとっても、とても貴重な機会であり、なんて贅沢な研修！自分も研修員になりたいといつも感じている。

研修の中で、離島研修と本土研修、2つの研修旅行をいれている。2ヶ月半という長い研修の中でも、離島研修は重要な位置をしめており、宮古島・石垣島・西表島をまわり各地のマングローブの視察・実習を中心に研修を進める。特に日本で最も大きなマングローブ林のある西表島では約2週間滞在し毎日フィールドへでかけていく。西表島の魅力は何と言っても壮大な自然だ。ご存知の方も多いかもしれないが、飛行場がないため石垣島まで飛行機で飛び、石垣の港からは高速船で約40分。島へ近付いてい

くと、うっそうとした深い緑の山が島を覆っている。ここは、日本の中でもマングローブの研究者達が集まってくる場所なのである。世界のマングローブ林には国によってはとても危険な生物がいることもあるため、そういった地域に比べると西表島はとても安全であるという点も、たくさんの方が口をそろえて言うことばである。

そしてもちろん、この島には研究者と比べものにならないくらい多くの観光客も旅行にくる。多くの観光客はダイビングをはじめとするマリンスポーツを目的としていることが多いのだが、マングローブも立派な観光資源の一つである。島内にはたくさんのカヌー会社があり、毎日のようにカヌーガイドがお客さんをつれてマングローブ林の中をツアーでまわっている。カヌーには当然エンジンもなく、水面に近い視線で川を進んで行くのは、本当に何回行っても気持ちの良いものである。私はいつもこの時たくさんエネルギーを自然からもらっていると感じている。私が初めて西表島へ行った時には「日本にもこんなところがあるのだ」と驚いたことを今でも鮮明に覚えている。

研修は6月からなので既に準備は始まっている。計画をたて、講師の先生方や JICA の方と連絡を取っていると、昨年の大変な思いを振り返りながらも、どんなものになるのかとても楽しみにしている。研修員の受け入れとは言っても、研修員や先生方から一番学ばせていただいているのは実は私なのかもしれない。何よりも、毎年2ヶ月半の間、研修員達とともに過ごす時、彼らは大切な仲間となって帰国していく。世界中に、マングローブという分野で仕事をしている仲間たちがいると感じられるのは最も大きな宝物である。

今年も素敵な仲間との出会いを期待している。
(2008.5)

特定非営利活動法人 国際マングローブ生態系協会 ISME (International Society for Mangrove Ecosystems)

ホームページ→ <http://www.mangrove.or.jp/>

お知らせ

「マハバーラト iii」出版報告

池田 運 (いけだ はこぶ) 訳

マハバーラト第3巻(全4巻) 定価 5,000 円 (税別)

2008年5月12日 発行

発行元 株式会社講談社出版サービスセンター

世界最大の長編叙事詩「マハバーラト」全4巻のうちの第3巻(第1巻は2006年6月・第2巻は2007年4月にそれぞれ発行)が出版されました。すでに、第1巻及び第2巻は第2刷の発行がされております。紀元前2世紀ごろからヒンドゥー教が形成されたといわれているが、その前の文献としての二大叙事詩「マハバーラト」「ラーマヤン」。インド神話として数多くの神々の物語が記されていて、インド人の信仰を示している。

訳者の池田さんは、1956年、インドの渡り、開所間もないサマンバヤ・アシュラムの活動に精力的に参加、10年近いインドでの生活の中、ときのインドを動かしていた多くの活動家、政治家と親交を持つという人物。優れた語学力で粘り強く数々のヒンディー文学の大作を次々とヒンディー語から直接日本語に翻訳する、という本邦初の比類なき翻訳家です。

ナマステ・インドア 2008 に参加申請中です!!

今年もナマステ・インドアに参加予定です!

イベント名: ナマステ・インドア 2008

開催日: 9月27日(土)、28日(日)

場所: 代々木公園

今回は夏にインドへ行く学生がいますので、サマンバヤ・アシュラムの近況を直接、たくさんの人にお伝えできるのではないかと考えています。詳しいことはブログにてお知らせしますので、参加が決まりましたら、たくさんの方のご来場をお待ちしています。

東京農業大学4年生、後輩を 連れて2度目のアシュラム訪問

意気込み

私がアシュラムに行くのは今回で2度目になる。1回目は19歳の時。先輩に連れられて、人生初の海外旅行がインドという、とても濃い経験をさせてもらった。

そして今回2回目のインド。私は4年生という立場になり、後輩を連れて行くことになる。ニュースで見るかぎり、インドの勢いはすさまじく、発展途上国と一言では言い表せなくなってきている。しかし、それはほんの一部なのだ。このサマンバヤの会が支援しているアシュラムとその周辺はきっと私が行った2年前とさほど変わりはないだろう。

そうやって発展の波に取り残されているかもしれない彼らは、何を見て、何を感じているのか、この目で確かめてきたい。そしてなんととってもあの笑顔のステキなドワルコ・ジーにお会いできることが楽しみである。

現地から通信の原稿を書きたいと思っているので、お楽しみに!

サマンバヤの会ホームページ & ブログのご案内!!

ホームページ: <http://www.questions.gr.jp/samanway/>

ブログ: <http://www.ratio.co.jp/blog/samanway/>

通信への情報提供を大募集しております!! インドをベースに、世界の貧困対策や NGO, 災害支援など世界で起こっているあらゆることをテーマに、思ったこと、考えたことなどを投稿してください。掲載にあたっては編集部で吟味させていただきますが、お気軽に下記のメールアドレスまでお送り下さい。

お待ちしております。

大畑: 13050032@nodai.ac.jp

●サマンバヤの会とは●

当会はインド・ビハール州にあるサマンバヤ・アシュラムが行う主にアウトカーストの子どもの教育のために、里親という形で資金援助をする窓口として活動している会です。里親といっても日本に子どもを連れてきて養育するわけではありません。養育費をサマンバヤ・アシュラムへ送金することを意味します。養育費はアシュラムの財政の中に繰り込まれ、その中から子どもたちのための諸費用が使われるという仕組みです。

貧しい家の子どもの教育を寄宿制で始めて30年以上が経った現在でもこの「学校」への大きな期待があります。4～10歳ほどの子どもが数年間、寄宿制で基礎教育を無償で受ける、その費用を外国からの里親による寄付で賄っています。そして、かつてこの学校で教育を受けた「卒業生」たちの中には慢性的貧困者も少なくなく、彼らの生活向上のための手助けができないものかと活動をしています。2002年から2005年、「卒業生」が活動するNGOへの資金援助スモール・グラント。2007年からサマンバヤの会からの資金を「卒業生」たちが委員会を作り手弁当で運営している資金貸し出し組織SEED BANK。サマンバヤの会は、サマンバヤ・アシュラムとその仲間たちへの生活向上のための資金援助、サマンバヤ通信の発行、世界に目を向ける姿勢、を大切にしている会です。

●サマンバヤ・アシュラムとは●

サマンバヤ・アシュラムはガンディー翁の高弟の1人、ビノーバ翁が創設し、その弟子の1人であるドワルコ・スンドラニ氏が中心となり、その運営にあたっています。

インドには「アシュラム」という組織があります。アシュラムとはヒンディー語で直訳すると「同等の仕事」となりますが、「精神修養の場」とか、ある種のセンター的役割を担う組織を指したりします。サマンバヤとはヒンディー語で「調和」とか「融合」などを意味します。英語では「harmony」にあたります。つまり、サマンバヤ・アシュラムは「調和のための修養道場」となりますが、インドの、そして地球に住む全ての人類の調和を目指す研修施設と言えるでしょう。

サマンバヤ・アシュラムでは、子どもの教育こそが未来のインドの開発のためになるという考えの上に立ち、身分制度の為に抑圧されているハリジャン（不可触民）の地位向上のために、その子弟の教育に重点を置いています。

入 会 案 内

● 里親会員

サマンバヤ・アシュラムが養育する子どもの資金を援助します。

里親会員に登録されますと、サマンバヤ・アシュラムは養育すべき子どもをサマンバヤ・アシュラムに連れてきて養育をはじめます。

5年間はその子どもの養育費を里親会員が保証することになります。

支払方法	5年一括	120,000円
	1年ごと	24,000円
	半年ごと	12,000円

いずれかの方法でお送りください。

会費のうち、一年当たり14,000～15,000円（120USドル相当）をサマンバヤ・アシュラムに送金し、残りをサマンバヤの会の運営費用に充てます。

サマンバヤの会からサマンバヤ通信を送付します。

● 賛助会員

サマンバヤの会の活動を資金面で支え、応援していただきます。

会費は1口5,000円/年で、サマンバヤの会の運営費用に充てます。

サマンバヤの会からサマンバヤ通信を送付します。

● 入会方法

(1) 入会のきっかけ、経緯、TEL、さしつかえなければ職業、Miss,Mr,Mrs,Msを記入して入会申込書として本部宛に郵送またはFaxしてください。

(2) 会費を郵便振替または現金書留にて送金してください。

(3) 入会の確認がされたことを通知します。

(4) 会員証は発行していません。

● 継続の場合

会員として継続される場合

(1) 会費を郵便振替または現金書留にて送金してください。

(2) 入金の確認がされたことを通知します。

● 退会

会を退会をする場合、速やかに文書で（郵送またはFax）お送りください。

編集後記

30周年記念会ではたくさんの方とお会いすることができてとても楽しかったです。私も里親になって40周年記念会に参加することを今から楽しみにしています。

今月号はその30周年記念会の記事を中心に編集しました。

来月はついに、北京オリンピック開催です。4年に1度の平和の祭典。勝っても負けても、気持ち良く終わることができることを祈って、ビールを片手に観戦したいと思います。(A.0)

郵便振替口座 番号 00260-3-15712
名称 サマンバヤの会 宛

サマンバヤ通信 85号

発 行：2008年7月12日（隔月第二土曜日）
発 行 人：サマンバヤの会
千葉県長生郡睦沢町大上 3615-3
本 部：〒299-4423 千葉県長生郡睦沢町大上 3615-3
TEL・FAX 0475-40-9795
東京事務所：〒113-0033 東京都文京区本郷 5-1-16
NP-IIビル5F 東大教育研究所内
TEL 03-3815-3035 FAX 03-3818-1219
印 刷：株式会社ラティオインターナショナル